

VII 結語

1. 古代榛沢郡と熊野遺跡B区 一律令的集落構造の変化について一

はじめに

熊野遺跡B区の整理を通して、検出された住居跡の構築方向からその変化をとらえ集落の構造がどのように変化するのかを明らかにしたい。

集落研究には住居跡の主軸方向の配置や数軒から構成された住居跡の単位を把握し、集落の変遷を指摘するなどこれまで多くの研究がある。高橋一夫氏は、ある時期に突如として集落が出現し、この集落はある時期に突如として消滅する。しかも、こうした集落は大規模集落であることに注目し「計画村落」という概念を設定し、古代集落の分析をおこない一般の自然村落と区別した。しかも、計画村落は、行政的で強制的なものであるとし、園宅地の所有が認められていないとした（高橋 1979）。また、岡部町六反田遺跡の検討においては、竪穴住居跡の入り口部を特定し、集落内の道を想定し、そこから「小住居跡群」および「住居跡群」をとらえた（高橋 1983）。鈴木徳雄氏は、古代児玉郡における集落設営の計画性にかかる諸問題について具体的に検討し問題提起をしている（鈴木 1991）。この中で、「将監塚・古井戸遺跡に認められるような平坦地に散開する大規模な集落域を定め、住居間の空閑地を含めて開墾する形態は、従来の鬼高期の集落形態とは異なっている」とし、高橋氏の述べた計画村落について、農業だけに立脚した集落ではなく寺院や官衙あるいは開発のために強制力をもった目的的設営された村落に重点が置かれたことに注意すべきであるとした。さらに、鈴木氏は、文献史学の立場からの理論的背景をもつ「計画村落」という範疇を、考古学的な現象の範疇に用いるのは好ましくなく、計画性の高い集落については「計画的集落」という範疇で把握すべきだと提唱した。鳥羽政之氏は熊野遺跡の研究を精力的に行なっている。この中で、律令期の集落分析を掘立柱建物跡、竪穴建物、井戸等が「コ」の字型、「L」字型、雁行型等規則的に配置される遺構群に注目しこれらの建物群を「自樹原・檜下型集落構成」と

呼称した。しかも、建物群とその周辺の竪穴建物は有力家長の家と中小農民の居住地ととらえた（鳥羽 1997）。

今回は、熊野遺跡B区の竪穴住居跡がどのような規制や方向性をもっているのか、また、これらがどのように変化するのか。さらには、榛沢郡内の他の集落化を合わせて検討し集落構造の変化の相異点と変化を引き起こす要因について検討し問題点を考えたい。

1 土器の変遷による時間軸の設定

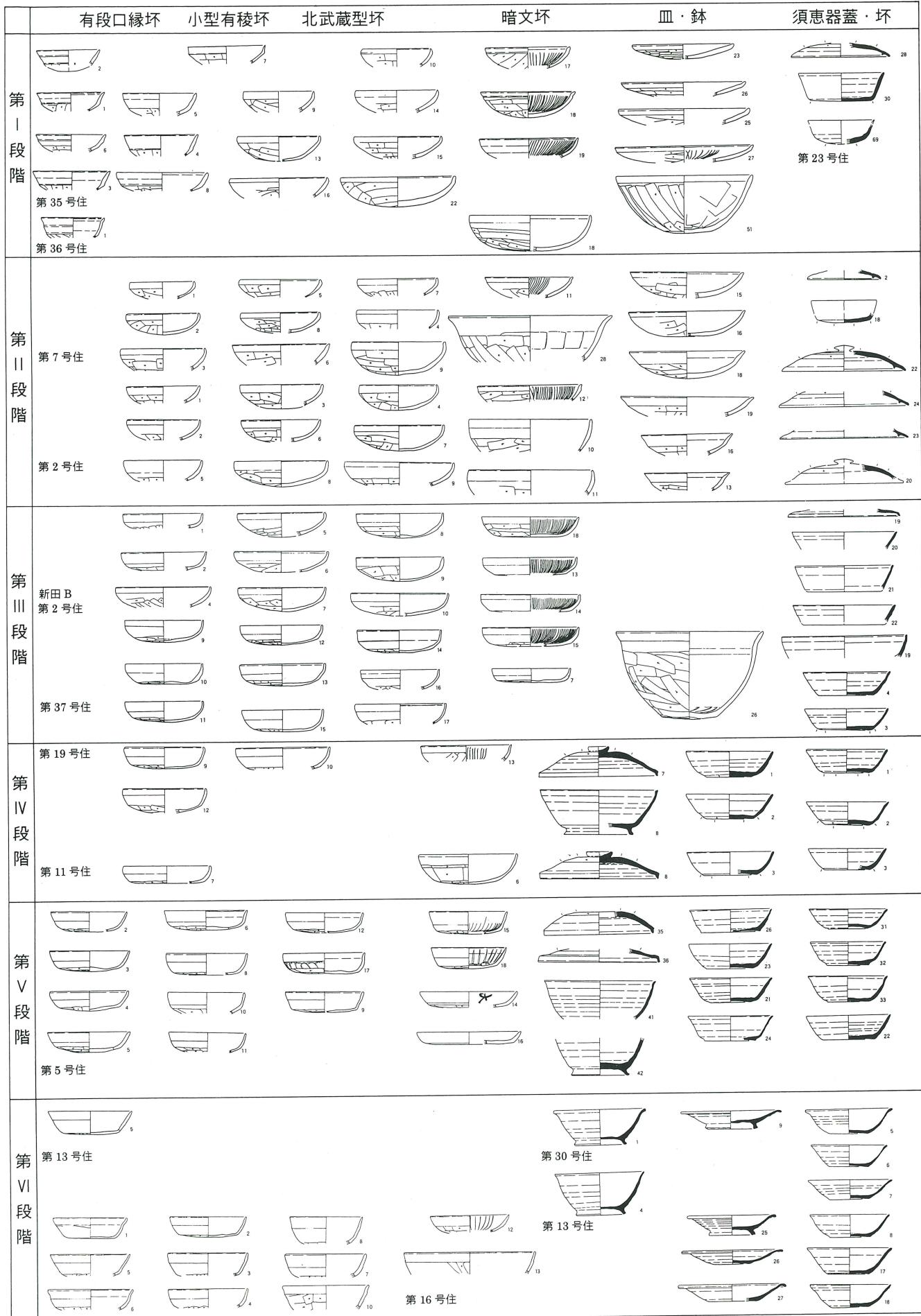
熊野遺跡B区および新田遺跡A・B区から検出された住居跡は、58軒、出土した土器から概ね7世紀後半から9世紀後半である。隣接する熊野遺跡A・C・D区および岡部町教育委員会による熊野遺跡第1次～第96次の調査などで約400軒の竪穴住居跡、約150棟もの掘立柱建物跡を検出しており、これらの調査成果を待たねば熊野遺跡の詳細な土器変遷や集落分析は不可能である。今回は、熊野遺跡B区の調査成果をもとに若干の土器の変遷を検討し、集落構造の変化を検討する時間軸を設定したい。

検出された土師器は壺、皿、暗文壺、鉢、甕、甑、台付甕、須恵器は壺、蓋、椀、鉢、高台付壺、皿、盤、壺、甕、この他鉄器、石器がある。今回は、土師器壺、皿、暗文壺、須恵器壺、蓋、高台付壺を中心に検討し6段階に時間軸を設定した。

第Ⅰ段階

熊野遺跡B区においては出現期にあたる。第35号住居跡出土の土器群が該当する。土師器壺は鬼高系の須恵器模倣壺である有段口縁壺が残存する。口径は10cm前後と11cm前後、最大径は13.7cmである。主体的に出土する土師器壺は北武藏型壺である。口縁部が内屈または内湾し底部は丸底である。整形は口縁部ヨコナデ、体部は手持ちヘラケズリを施す。口縁部と体部の境は未調整部をほとんどもない。法量的には大・中・小の器種組成が存在する。また、7は口縁部と体部の境に弱い稜をもち模倣壺の系譜を引く小型有稜壺である。

第188図 土器変遷図



暗文坏はいずれも丸底であるが、口縁部の形態や調整法に差異が認められ、一様ではない。口縁部は短いヨコナデを施し、口唇部は内面に弱い面をもち断面三角形である。器面は17のように土師器坏と同様のややざらつくものと19のように丁寧に撫でられ光沢をもつものが存在する。皿は、暗文をもつものともたないもののが存在する。形態は器高浅く、口縁部は直線的に開くものや上方にわずかに立ち上がるものなど様々である。須恵器は末野産の坏Gの蓋・身を共伴する。89は第23号住居跡出土資料である。

第Ⅱ段階

この段階の資料は第7号住居跡と第2号住居跡の土器群が該当する。両住居跡には若干の新旧が認められる。出土する土器は全体的に法量を大きくし、土師器坏は前段階に認められた有段口縁坏、小型有稜坏は姿を消す。主体は北武藏型坏であるが第7号住居跡では体部の未調整部がわずかであるのに対し第2号住居跡では未調整部を明瞭に残す。口縁部の形態もやや内湾するのに対し、第2号では上方に立ち上がる。皿は、前段階のような形態は消滅し、第7号住居跡出土の皿は外傾に内湾気味に立ちがる15、16と、逆ハの字状に開く18が出現する。第2号住居跡ではいずれも逆ハの字状に開くものである。須恵器は第7号では坏Gの蓋、身が残存し、大型の返りをもつ蓋と共に伴する。第2号では大型の返りをもつ蓋のみとなる。

第Ⅲ段階

この段階の資料は新田遺跡B区第2号住居跡、熊野遺跡B区第37号住居跡が該当する。土師器坏の形態は丸底気味で、口縁部は上方に立ち上がる。暗文坏は、形態が平底気味で体部内湾する。整形は底部ヘラケズリ、体部外面に未調整部を残す。須恵器は無返りの蓋、坏は浅く口径大きい。整形は底部外周回転ヘラケズリである。新田遺跡B区第2号住は南比企産、熊野遺跡B区第37号住は末野産である。

第Ⅳ段階

この段階の資料は第19号住居跡、第11号住居跡が該当する。土師器坏は平底化の傾向を強くし、底部外面

をヘラケズリする。体部は上方に立ち上がりわずかに開く。須恵器は底径がやや縮小し外周を回転ヘラケズリする。蓋・坏・高台付坏とともに産地は末野産である。

第Ⅴ段階

この段階の資料は第5号住居跡が該当する。土師器坏は平底化傾向を強くし、体部は外傾にやや開いて立ち上がる。また、9のような平底の土師器坏が出現する。暗文坏も9と同類の形態である。皿は木製皿の模倣品とみられる。須恵器は末野産と南比企産が検出されるが末野産が多い。坏の底部調整は糸切り離しママである。

第Ⅵ段階

この段階の資料は第10号住居跡、第13号住居跡、第16号住居跡が該当する。土師器坏は平底で、体部は外傾にわずかな屈曲をもって開いて立ち上がる。須恵器は高台付皿、高台付碗、坏などが検出され生産地は末野産が主体である。

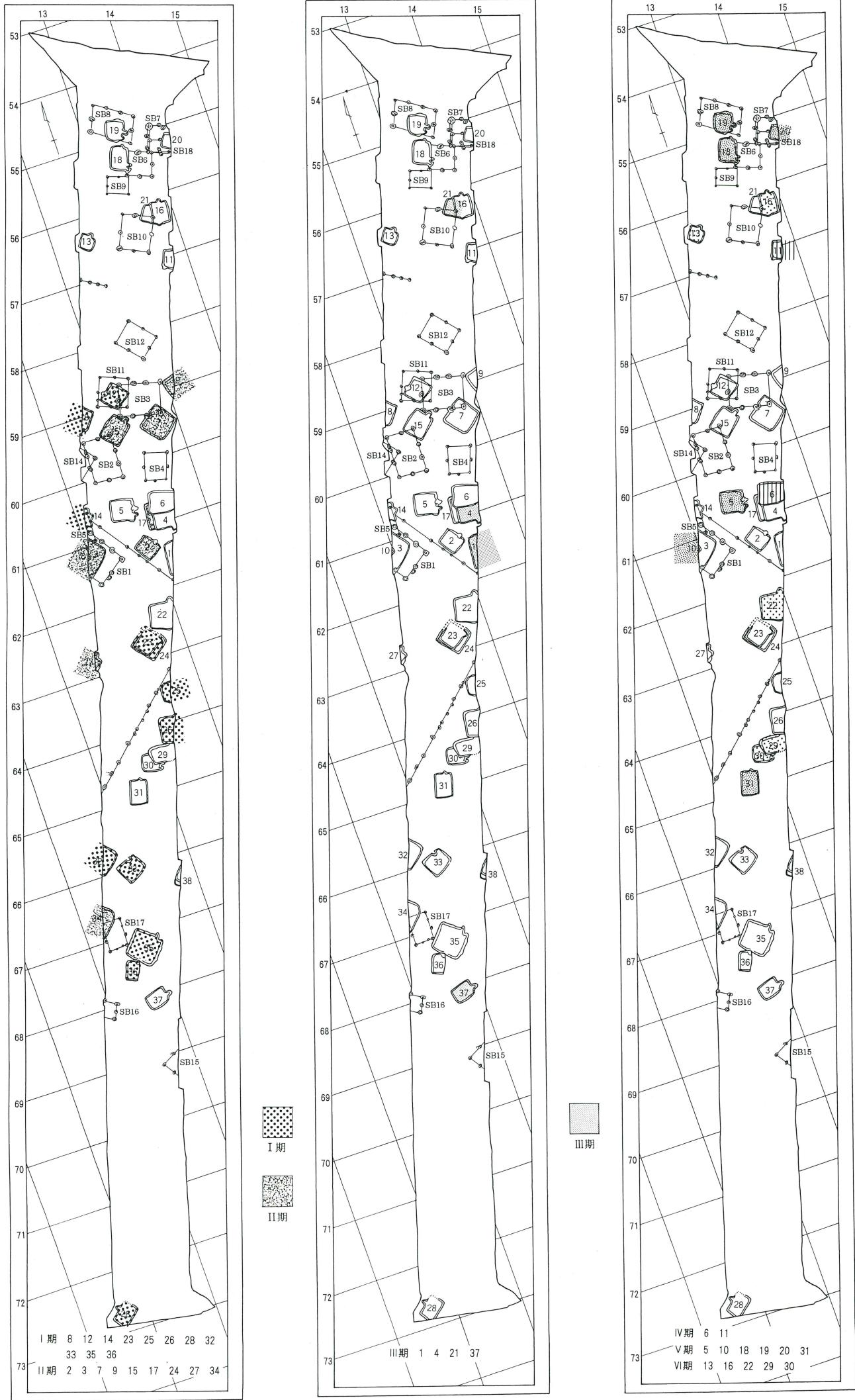
このように検出された土器の変遷を第Ⅰ段階～第Ⅶ段階に区分した。集落の変遷はこれをもととして検討した結果である。

年代的想定をすると、第Ⅰ段階は砂田前遺跡の第V期新、末野遺跡第VI段階と平行し、概ね7世紀第4四半期から8世紀初頭。第Ⅱ段階は砂田前VI期古、内出Ⅱ期・Ⅲ期、末野遺跡第VII段階と平行する。概ね、8世紀第1四半期とする。第Ⅲ段階は砂田前第VII期新、内出IV期、末野Ⅲ段階と平行すると考えられ8世紀第2四半期から中葉とする。第Ⅳ期は8世紀後半、第V期を8世紀末～9世紀前半、VI段階を9世紀後半とする。

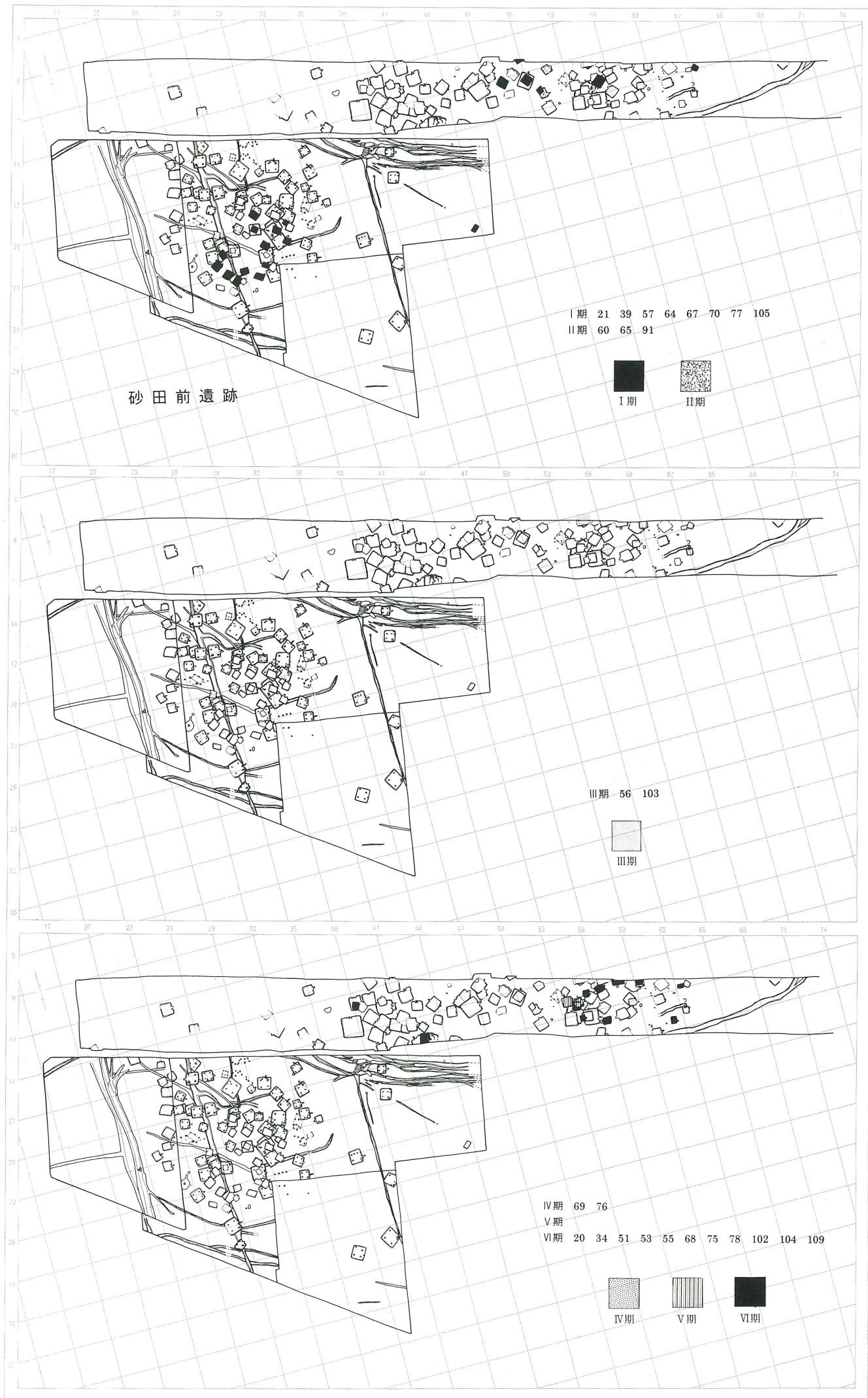
2 集落構造の変遷

熊野遺跡B区の住居跡を段階別に検討を行った結果第192図に示したような変遷が想定される。もちろん、土器編年における段階の推移は時間幅が長くその間に住居跡が継続することはやや無理があり、近接する住居跡の存在は全てが同時性をもっていたとは考えられず、同じ段階においても変遷する可能性を含む。ここでは、住居跡の方向性に注目し、軸方向が北に対し斜

第189図 熊野遺跡B区集落変遷図



第190図 砂田前遺跡集落変遷図



行するのに対しほぼ直交する形態の存在が認められた。方向性の変化が数軒の単位による住居跡群などで構成される居住空間により規制されるのではなく、むしろ、集落全体の居住空間は時間的変化の中で規則的に変化した可能性が認められる。

熊野遺跡B区の第Ⅰ・Ⅱ段階では、竪穴住居跡の軸方向が北方向に対し約25°～60°前後斜行して構築され

白山遺跡

I期	2 3 5B 12 18 19 20 21 27 46 61 67A 70 72
II期	6 15 34 43 47 48 49 50 51 55 56 63 65 66A 71A
III期	22 28 32 35 52 53 54 60 62 64
IV期	17 29 36 41B 44 57 58 59 77 78
V期	10 11 13 25 37 38 41C 73 74
VI期	1 4 5A 7 8 9 14A 14B 16 23 24 39 40 41A 66B 67 68 69B 75

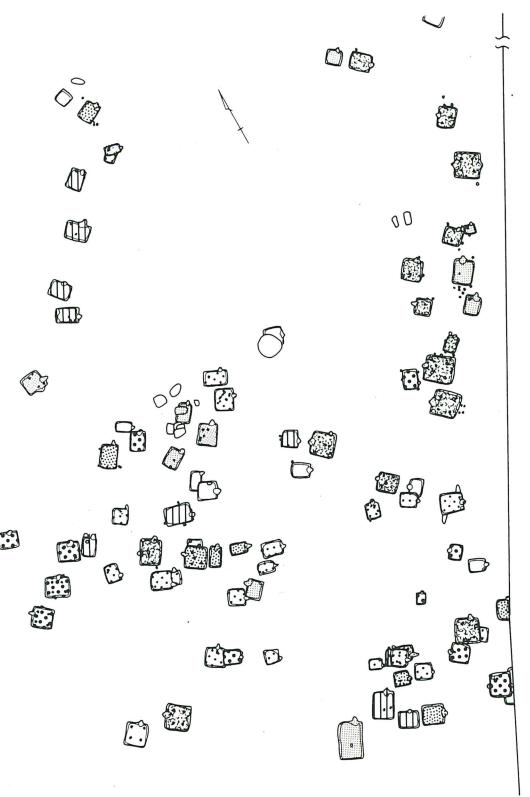
内出遺跡

I期	2 3 19
II期	4 5 9 13 14 15 20 21
III期	8 10 12 17
IV期	1 6 7 11 16
V期	
VI期	

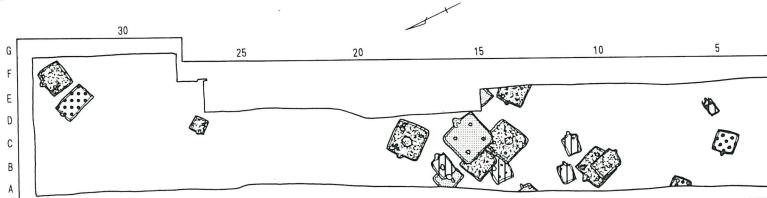
六反田遺跡

I期	5 32 43 46 47 58 63 67 68 83 99a 99b 112 117 119 122 127 130 131 135 138 139 140 150 151
II期	8 18 23 26 34 35 39 44 45 51 55a 55b 56 61 66 70 79 82 84 88 90 92 95 97 105 134 136 147a 147b
III期	6 24 64 85 86a 86b 87 96
IV期	2 12 50 89 101 116 120 143 144 106 110
V期	106 110
VI期	1 10a 10b 11 15 19 21 25a 25b 27 28a 28b 42 49 52 65 75 77 98 107

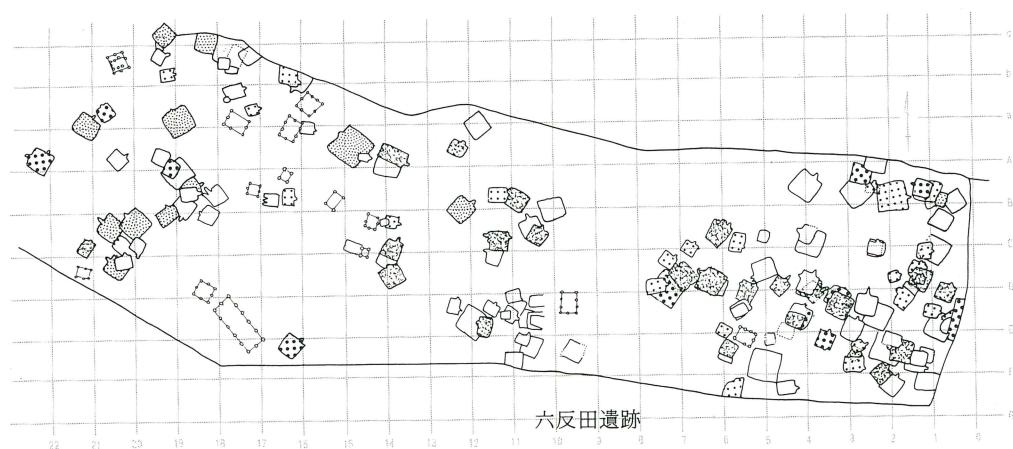
第191図 白山、内出、六反田遺跡集落変遷図



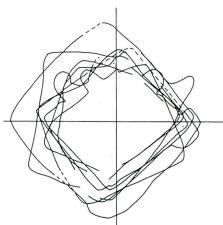
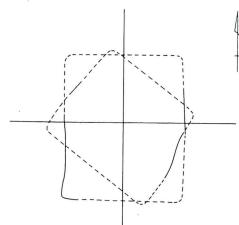
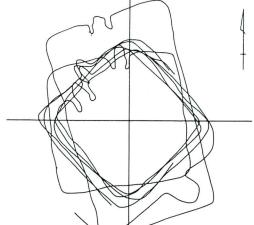
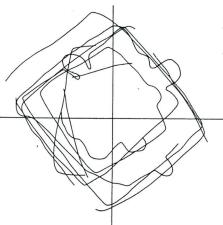
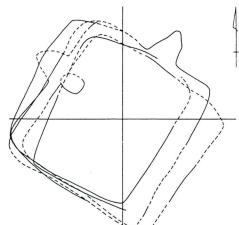
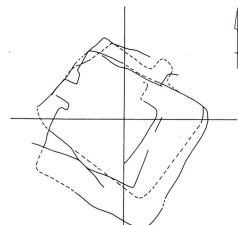
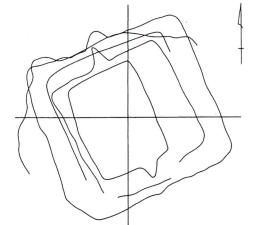
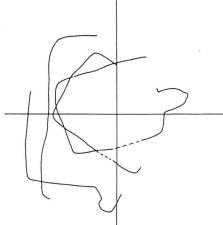
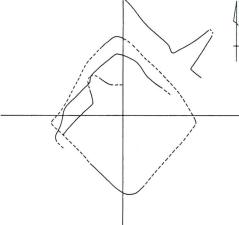
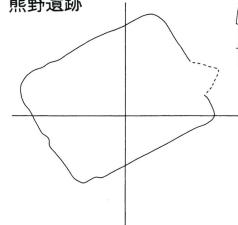
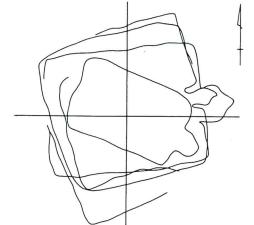
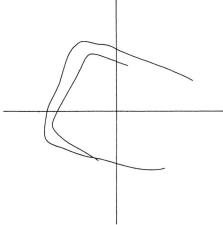
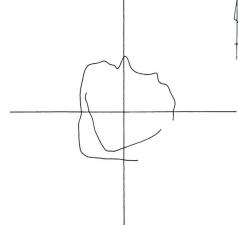
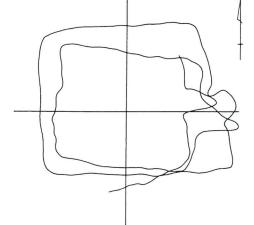
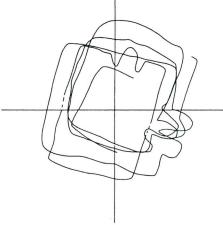
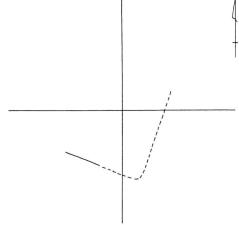
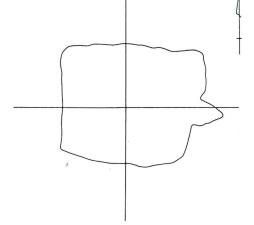
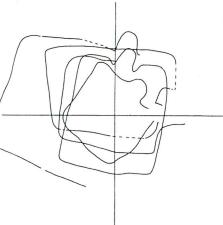
白山遺跡



内出遺跡



第192図 住居跡変遷図

	熊野遺跡 B 区	新田遺跡 A 区	新田遺跡 B 区	内出遺跡
第一段階				
第二段階				
第三段階				
第四段階				
第五段階				
第六段階				

住居跡縮尺 1 : 250

	砂田前遺跡 B P	砂田前遺跡	六反田遺跡	白山遺跡
第一段階				
第二段階				
第三段階				
第四段階				
第五段階				
第六段階				

ている。例外的住居跡の存在はあるが、37軒中20軒が該当する。第Ⅲ段階においては、21号住居跡が斜行するが、第1・4・37号住居跡はほぼ北方向に軸を変化させる。第Ⅳ、V、VI段階においてはほとんどの住居跡方向が北方向に統一されていた。

ではこうした傾向がどの程度の範囲におよぶのか同じ榛沢郡内の遺跡の検討を行ってみる。先にも触れたように、熊野遺跡A、C、D区の調査成果が待たれるが、新田遺跡A、B区をはじめこれまで調査報告された砂田前遺跡、白山遺跡、内出遺跡、六反田遺跡、宮西遺跡について分析を行った。

砂田前遺跡は、熊野遺跡の北東に位置する。集落の存在は6世紀前半の古墳時代後期から開始され奈良・平安時代に至るまで住居跡の存在が確認された。ここでは特に7世紀後半以降の住居跡を対象に集落変遷を検討した。第Ⅰ段階では北側と南側に集落が対峙して存在する。いずれの住居跡方向も北に対しほぼ斜行すると考えられる。第Ⅱ段階になると北側集落のみ継続し、南側の集落は終息してしまう。北側集落はこの段階ですでに斜行する住居跡と直行する住居跡が存在する。第Ⅲ、IV、V、VI段階ではほぼ住居跡は直行する。

内出遺跡は、熊野遺跡の東に位置する。ほぼ同一の集落である。集落の存在は7世紀後半から開始され奈良時代に至るまで住居跡の存在が確認された。第Ⅰ段階では、ほぼ斜行する住居跡が主体となり、第19号住居跡は直行し、第20号住居跡は長軸が長く形態に特殊性をもち傾きの角度が弱い。第Ⅱ段階で3軒であるが斜行する。第Ⅲ段階では規模の小さな第1号住居跡が斜行し、他の2軒は直行する。第Ⅳ、V段階ではほぼ住居跡は直行する。第VI段階の住居跡は認められなかった。

白山遺跡は、熊野遺跡の東側に隣接する集落である。にもかかわらず他の集落の変化と大きく異なり軸方向がいずれの段階も斜行する住居跡が主体である。集落構造が第Ⅰ、Ⅱ段階をそのまま踏襲して第Ⅲ～VI段階まで構造的变化を示さず展開する。熊野遺跡と同様の時期に集落が営まれるにもかかわらず、この違いは、

北側に存在する白山古墳群（第3図参照）による規制が伝統的に意識されていた可能性を考えれ、古墳造営領域に奈良・平安時代の住居跡が確認されない。地形や台地の崖線、古墳群の領域が伝統的に残された集落構造となる。

六反田遺跡は、熊野遺跡の西約2キロに位置する。集落の存在は古墳時代前期から開始され奈良・平安時代に至るまで住居跡の存在が確認された。ここでは特に7世紀後半以降の住居跡を対象に集落変遷を検討した。第Ⅰ、Ⅱ段階では住居跡方向が北に対しほぼ斜行すると考えられる。第Ⅲ段階になると斜行する住居跡と直行する住居跡が存在する。第Ⅳ、V、段階ではほぼ住居跡は直行する。第VI段階になると直行する住居跡に混じって再び斜行する住居跡が出現する。

宮西遺跡は六反田遺跡の南側に近接する集落である。岡部工業団地造成により発掘調査が進められ、現在整理が行われており、調査成果は明らかにされていないため詳細は不明である。しかし、隣接する大寄八幡神社周辺の道路拡幅調査に伴って発掘調査された宮西遺跡では奈良・平安時代の集落が検出された。調査範囲が狭いため住居跡の全体が不明確ではあるが確認された住居跡壁の方向などから北に対しほぼ直行する軸方位をとることがわかった。宮西遺跡の住居跡の時期は概ね第Ⅲ段階以降である。

榛沢郡内の律令期の集落について時期変遷別に検討をした。その結果、住居跡の方向性は北に対し斜行する住居跡は第Ⅰ、Ⅱ段階に認められ、北に対しほぼ直行する住居跡が出現するのが第Ⅲ段階に認められた。また、第Ⅳ、V段階ではほとんどの住居跡が直行する傾向が認められた。第VI段階では検討資料が不足のためやや不明瞭ではあるが熊野遺跡B区では直行する住居跡、六反田遺跡ではやや斜行化する住居跡も認められた。しかし、白山遺跡ではこうした集落変化は認められず、第Ⅰ～VI段階に至るまで斜行する住居跡で構成されていた。

3 まとめ

集落の住居跡は、建物方向にまとまりと変化が存在

する。これらは、集落構造に一定の規範が存在していたことを示していると考えられる。カマド位置や住居規模には差異が認められこうした住居構造の違いと住居跡方向では異なった規範が存在していたのであろう。

住居跡方向は集落領域の区画に起因すると考えられ、第Ⅰ、Ⅱ段階は前段階の継続であるとともに、地形の方向性に規制され区画されていた可能性が推測される。熊野遺跡は中宿遺跡とともに北側に櫛引台地と妻沼低地との境に崖線が存在し、この地形的規制が台地上に展開する律令的集落に規範を設け集落構造を形成させたものと考えられる。しかし、第Ⅲ段階に至っては、これまでの規範とは別の東西南北といった方向性の規範が新たに集落構造に適用され住居跡が構築の際に順次変化したものと考えられる。第Ⅵ段階においてはこの規範に変化がおきたものと考えられる。こうした背

景には、集落領域の規範だけではなく、他の空間領域、また、水田等の条里施行に伴う区割りが、郡内にどのような規範を示していたのかその影響がどの領域までおよんでいたのかが問題となろう。律令時代とは戸籍により個別に人身を把握するとともに、条里により土地の管理を使用していたのではないだろうか。この様相を熊野遺跡B区では住居跡方向の規範として現象化された結果ではないだろうか。

以上述べてきたように、集落構造の変化が榛沢郡内の傾向としてどこまでとらえることができるのか、また、他群においての傾向を掴むことができるのか、今回検討した新田遺跡、内出遺跡、砂田前遺跡、六反田遺跡では適合した。しかし、白山遺跡では不適合であった。こうしたことが他の集落においてどのような傾向を示すか今後の課題としたい。
(赤熊 浩一)

2. 大形甌の問題

熊野遺跡B区からは7点の土師器大形甌が出土し、その中には、内面にミガキ処理を施されていたものもあった。ここでは、熊野遺跡B区を中心とした地域から出土した大形甌について検討し、特に内面ミガキ処理のされている大形甌に注目して考察を加えたい。

a 形態(第193図)

熊野遺跡B区周辺から出土した大形甌を戸森前遺跡(中村1999)・砂田前遺跡(佐藤1998)・熊野遺跡B区(赤熊2000)の編年をもとに分類した。

戸森前Ⅶ期：大形甌・カマドの出現期。胴部の張りが強い。

戸森前Ⅷ期：口縁部の屈曲が弱くなる。

戸森前Ⅸ期：胴部の張りが弱くなる。

砂田前Ⅰ期：長胴化が進む。

砂田前Ⅱ期：大形甌の出土例が増大する。ミガキ処理が施されるものが出現する。

砂田前Ⅲ古期：大形甌の出土例が最も多い。

砂田前Ⅲ新期：大形甌の出土例が減少はじめる。

砂田前Ⅳ古期：ミガキ処理された大形甌の出土例なし。

砂田前Ⅳ新期：胴部が直線的に立ち上がる。

砂田前Ⅴ古期：出土例1例のみ。

砂田前Ⅴ中期：ミガキ処理された大形甌の出土例なし。

砂田前Ⅴ新期：大形甌の出土例なし。

熊野Ⅰ期：ミガキ処理された大形甌の最終段階。

熊野Ⅱ期：破片のみの出土のため、詳細不明。

熊野Ⅲ期：大形甌の出土例なし。

熊野Ⅳ期：器壁がかなり薄くなる。

熊野Ⅴ期：破片のみの出土のため、詳細不明。

(これ以降大形甌の出土例なし)

大形甌の形態は、同時期の甌の形態の変化と同様に長胴化が進み、口縁部の屈曲も弱くなる。また、器壁の厚さも薄くなる傾向にある。しかし、時期を通して、著しい形態の変化は認められなかった。カマド自体にも大きな変化が起きなかつたと推測できる。

第193図 出土遺物対照表	B：砂田前遺跡 (1991)
熊：熊野遺跡B区(2000)	砂：砂田前遺跡 (1998)
六：六反田遺跡 (1981)	岡：岡部条里遺跡(1998)
白：白山遺跡 (1989)	中：中宿遺跡 (1997)